

Lead

All roads lead to the future リード



コミュニケーションペーパー
2014 夏号 Summer 夏号 ¥0 TAKE FREE



〈特集〉

高知の人・地域・自然に学ぶ フィールド実習

特集1「山で考える」地域協働入門
特集2「海辺で学ぶ」臨海実習

のぞいてみよう
高知大学の授業!! Labo通信
県産材を活用して
高知の地盤を守れ

まなびの時間
モノや地域という「窓」から
世界をつかまえる

ぼくらのキャンパスライフ
ジャズを楽しみ、魅力を発信!

Action! 地域×高知大学
守れ! 土佐あかし

高知大学ニュース

高知県大豊町怒田

高知大学で開催するイベントをご紹介します。

イベントインフォメーション Event information 2014 夏号 Summer 夏号



オープンキャンパスの お知らせ Open campus 2014

朝倉キャンパス

8/2日 人文学部 10:00~15:00

入試や学生生活の質問に教員・在学生が対応します。●学部・学科紹介●入試相談●在学生による相談コーナー●保護者の方への案内●模擬授業●在学生の話(詳しくは、人文学部ホームページで案内します。) <http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/>

8/2日 理学部 10:00~15:00

●学部紹介●学部構成と入試概要●わたしの大学生活(先輩の話)●パネル展示と入試相談コーナー ※理学部1・2号館、情報棟、地震観測所、水熱化学実験所(附属施設は自由に見学できます。)

8/3日 教育学部 10:00~15:00

●学部説明●平成27年度の入試について●学校教育教員養成課程のコース紹介●入試相談・生活相談



顕微鏡で
何が見えるかな?

8/2日・3日 10:00~15:00
地域協働学部
(設置認可申請中)

●新学部なんでも相談コーナー●パネル展示、DVD放映●模擬授業●地域で活動してきた学生達と座談会

8/2日 土佐さきがけプログラム 10:00~15:00

保護者向けガイダンス
就職・奨学金・授業 ●サークル紹介
料免除・留学関係の ●なんでも相談コーナー
説明を行います。 ●寮見学



先輩から
いろいろ教われる!

岡豊キャンパス

8/3日 医学科 13:00~16:30

●医学科説明●入試情報●模擬授業●スキルラボ実習体験●研究室見学●教員・在学生への質問コーナー

8/3日 看護学科 10:00~12:30

●看護学科説明●入試情報●カリキュラム説明●実習室見学・体験●教員・在学生への質問コーナー

物部キャンパス

8/3日 農学部 9:00~16:00

●高知大学農学部の見どころ・学びとは●役に立つ入試情報●コース別企画により各コースの魅力に触れる●在学生による大学生活紹介●パネル展示●キャンパス内施設見学と研究室めぐり●入試・相談コーナー

8/3日 土佐さきがけプログラム 9:00~16:00
地域協働学部 11:00~15:00
(設置認可申請中) ※内容は朝倉キャンパスと同じです。



自然の中で
のびのびと体験!!

◎企画の内容、開催時間は変更となる場合があります。
◎詳細が決まり次第、順次ホームページに掲載します。(http://www.kochi-u.ac.jp/nyusi/open-campus.html)
◎高知大学ホームページ・携帯電話サイト(http://daigaku.jp/kochi-u/)から申込をお願いします。



月2回配信(第2・4金曜日)

高知大学からメルマガを配信しています。大学の「入試情報」から「あれこれ(これは面白い)」まで!!

登録は
こちらから



<http://daigaku.jp/kochi-u>

お問い合わせ先 皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。



高知大学 高知大学広報戦略室
高知大学 検索
<http://www.kochi-u.ac.jp/>

TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033
〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail:kh13@kochi-u.ac.jp

イベント情報

物部キャンパス
一日公開 11/3日

様々な体験が
できるよ!

地域の特産品、農作物の
販売や人気のトレーラー
体験コーナーをはじめ、大
学を身近に感じられる催し
が一杯です。お問い合わせの
上、是非お越し下さい。



第34回南風祭 10/11日 10:00~19:00
10/12日 10:00~20:45
岡豊キャンパス

それいけ! 南風祭
~愛と勇気のキャンパスさ~

今年のテーマは、高知に馴染み深いアンパンマンのように、南風祭を通じて高知の皆様が夢と希望を与えたいということから決まりました。今年の学祭もよろしくお祈りします!



黒潮祭

朝倉キャンパス
11月1日(土)、2日(日)に
開催します。遊びに来て
下さい。



みんなで
来て下さいね!

様々なイベントを
ご用意しています!

第5回 11/2日
ホームカミングデー

今年は、大学祭と同時開催です。卒業生の皆様の多数のご参加をお待ちしています。



高知大学の最新情報を伝えたい
THE こうち
ユニバーシティ CLUB

ぜひ
お聴き
下さい

FM 高知 毎週日曜日 放送中
81.6MHz 9:30~9:55

高知大学のHPから過去放送分も視聴できます!

http://www.kochi-u.ac.jp/outline/kouhou/radio_fmkochi/
高知大学の教育、研究、地域貢献等の
ホットな情報をお届けします。

●スポンサー企業
高知銀行 / 放送大学 / 相愛 / ソフテック



フィールド実習

山の人々との交流を通じて、中山間地の営みから、日本の未来までを考える。

山の暮らしをフィールドで体感する 「地域協働入門Ⅰ」

高知県の森林率は全国一の84%。緑濃い山の奥深くでも、人々の美しい自然や地域特有の文化を大切にしたい。心豊かな暮らしが営まれていた。そうした山間部の集落で、高知大学は積極的にフィールド実習を行っています。山の暮らしを体感する授業は「地域協働入門Ⅰ」。共通教育科目として霜田博史准教授らが担当しています。

「地域協働入門の授業はⅠからⅤまであり、いずれも実習を行います。Ⅰはまさに入門編ですね。実際に地域に出歩いて、人と話したり、現場を見



たりして、いま山の暮らしで何が起きているのか、イメージを広げてもらいます。何かを学ぶ、教えられるというよりは、自分で見て、感じ、気づき、



原木に菌を打つ行程



菌を打った原木を山に運ぶ



休耕田を耕す

高知県のさまざまな地域で生じ、深刻化している過疎化の問題。大学に入学した若い学生たちは、山の暮らしにこだわる高齢者の話を真剣な表情で聞いていたそうです。2、3回目のフィールド実習の現場は、大豊町のハーブ園や温室があるオートキャンプ場「ゆとりすとパークおとよ」。最近、椎茸栽培にも取り組むようになったというところで、栽培作業を体験しに行きました。

「学生は原木に菌を打つ工程と、その原木を山に運んで寝かせる作業に従事しました。これらの作業は普段、4〜5人でやっているのですが今回は15人の学生で行いました。すごい急斜面を大きな丸太を持って運ぶなど、大変な重労働でした。日頃食べているものがどうやって生産されているのか、学生たちは身をもって体感したと思います」
4回目のフィールド実習は、高知市から車で約1時間30分、棚田が美

しい大豊町の山里、怒田地区で行いました。「過疎が進み休耕田になっている畑の手入れが主な作業でした。午前中は、堆肥を畑に撒く作業を行い、午後は、斜面にある畑で、土上の枯草を除き、土を鍬で掘り返し、小さい草を除いてもう一度畑として使えるように学生たちと汗を流し作業を行いました。現場に出かけて、休耕田があればそれを見て、草があれば取り除き鍬で掘る。学生の中には、こうした田舎の光景自体を目にする、作業をすることが初めての子がほとんどです。見て体験することが大事なんです」

高知の山は、ある意味、日本の最先端！

普段の生活とはまったく違う世界に触れるフィールド実習。履修する学生の大半は地域活性化に興味があり、山の暮らしを見て考えるところも多いようです。素朴な感想や疑問、

考えるきっかけになれば、というのが授業の一番の狙いです」
キャンパスでの授業のほか、現場に4回出向いて日帰りのフィールド実習を実施。毎年、高知県内陸部の嶺北地域に出かけており、今年は土佐町と大豊町が実習の現場になりました。

地域の人の話を聞き、 農作業を体験 山の日常を肌で知る

今年行われている「地域協働入門Ⅰ」のフィールド実習。1回目の実習の現場になったのは、土佐町の石原地区という集落です。
「石原地区では過疎化によって農協が撤退し、ガソリンスタンドや売

感動したことなど、さまざまな内容のレポートが提出されるそうです。

「事前に持っていたイメージと、実際の現場で行われていたことが合っていたのか、違っていたのか。それがわかるだけでも、1年生には意味があることだと思います」
地域にもっと関わりたい、他のところも見たいという学生はコラボ[※]を利用して、さらに地域と触れ合うこともできるといいます。

「高知県は高齢化、過疎化など、これから日本が直面するであろう課題を先取りしています。高知県の中山間地で実習するということは、ある意味、日本の最先端を学べるということなんです」
高知県の山の暮らしは、この国の未来の暮らし。日本一の森林県らしいこの集中講座、学生たちの得るものは想像以上に大きそうです。

霜田 博史

教育研究部 人文社会科学系 人文社会科学部 准教授
立命館大学経済学部卒業、京都大学大学院中退。博士（経済学）。地方財政論、財政学が専門。「地方にいないと見えないものがあると、強く感じます。この授業も、単に地域を見に行くだけでなく価値があると思います」



※コラボ
「コラボレーション・サポート・パーク」の通称名。地域で活動したい学生を支援する高知大学の取り組み。学生と地域の懸け橋役を行っている。

店が維持できなくなってしまう。そこで地域住民が出資し、県の補助も受けながら、生活支援サービスなどを行う集落活動センターを運営するようになりました。なぜ、こうした取り組みを行っているのか、地域の人に話を聞かせてもらいました」





同定作業

教員から採集に関する説明を受けて行動開始。周辺の岩場を観察して海藻を採集します。

「自然の状態を、実際に自分の目で確かめることが大切です。採集した海藻は後で標本にするので、根っこから葉の先まできれいに採ってもらいます。濡れない岩場の上だけを採すなど、楽をしてはいけません。採集できませぬ。いろいろな海藻を採るには、海の中に少しは入るなど、チャレンジする必要があります」

この日採集したのは全部で30種類ほど。再び実習船に乗船し、海洋生物研究教育施設に戻りました。次



採集



標本作業

は実験研究棟で、採集した海藻の種類を決める「同定」という作業を行った後、海藻は標本にします。

「まず大体の形態で仕分けた後、図鑑や資料を見て調べます。一見同じに見える海藻ですが、その形態を詳しく見ていくとたくさんの種類があることがわかります。生物の多様性に気づかせてくれます」

2日目は、前日標本にしなかった海藻の顕微鏡観察。

「海藻は単純な構造をしており、形態的な特徴だけでは種を決められない場合もあります。そこで、顕微鏡で組織を観察して判断します。海藻の成り立ちや生殖の仕方を理解するうえでも、内部構造の観察は欠かせませぬ」

顕微鏡による観察の後、施設の近くの岩場に出て、初日のように海藻を採集して標本にし、顕微鏡観察を行って2日目は終了。臨海実習第1期の最終日である3日目は、標本作製と顕微鏡観察を集中して行いました。

豊かな自然の中で、キャンパスにはない発見や驚きに出会う

実際にフィールドに出かけて行われる臨海実習。その目的はどこにあるのでしょうか。

海辺で学ぶ

自然豊かなフィールドがすぐ側。「海に強い大学」ならではの学びの場へ。

海洋生物の拠点施設とすぐ近くの海を舞台に「臨海実習」を開講

沖合を流れる暖流黒潮の恩恵を受け、豊かな生態系が育まれている高知県の海。「海に強い大学」として知られる高知大学は、この身近で素晴らしい自然を学びのフィールドにしています。研究・教育の拠点となるのは、土佐市宇佐町にある海洋生物研究教育施設。高知県人口の約40%が集中する県庁所在地、高知市の朝倉キャンパスから車でわずか30分という近距離にあります。

「研究教育施設のすぐ近くには、人の手がほとんど加えられていない自然が広がり、温かい海に生息する生物がたくさん見られます。海洋生物の実習の場にこれほど思われている大学は珍しいかもしれません」

藻類の細胞の研究を専門とする峯一朗准教授がこう話します。峯先生は海洋生物研究教育施設とその周辺の海で行われる「臨海実習」第1期の授業を担当。今年5月に行わ

れた高知大学ならではの実習の様子を紹介いたします。

実習船でフィールドへ！自然のままの海辺で海藻を観察、採集

臨海実習は主に理学部生物科学コースの2年生以上が対象。第1期から第3期まであり、すべてに出席して1科目の授業として単位を取得できます。第1期は海藻、第2期は海の動物をテーマにフィールドに出て実習。第3期は、施設内で動物生理学の実験を行います。

第1期の実習が行われるのは、毎年5月の大潮の干潮時です。

「5月は海藻が一番繁茂する時期です。大潮の日を選ぶのは、潮が最も引くから。普段は海面の下にいる海藻が上まで出てくるので採集しやすくなります」

実習は2泊3日の集中カリキュラムです。今年5月15日に朝倉キャンパスに集合して、大学のバスで海洋生物研究教育施設に移動。近くの



港から施設が保有する実習船で横浪半島の太平洋側に向かいました。学生らを乗せた実習船は、10分ほどで目的の海岸の沖合に到着。停泊した実習船から、同行した小さな船に乗り換えて海岸に上陸しました。都市部から1歩外に出ると、そこに広がる高知の自然。この海岸には手つかずの自然が残っていました。



「講義や室内の実験だけでは、実際に自然の中で生活している生物の生きている姿はわかりませぬ。たとえば、常に海中にいる海藻と、干潮時には陸に出ている海藻は種類が違います。臨海実習では、そうした天然の姿をじかに観察できます。また、組織を顕微鏡観察するうえでも、新鮮な海藻は反応がいいので結果が見えやすいんですよ」

身近なところにある素晴らしい自然に触れられる臨海実習。海の生物に興味があるなら、とても充実した時間を過ごせるでしょうね」と峯先生。3日間行動をともにすることによって、学生同士のつながりも深まるようです。

「海に強い大学」だからこそできる特色あるカリキュラム。次の第2期の開講は初夏。学生たちは再び横浪半島に向かい、今度は海の脊椎・無脊椎動物の採集にトライします。



教育研究部
 総合科学系 黒潮圏科学部門
 准教授

峯 一朗

北海道大学理学部卒業。博士(理学)。藻類の細胞生物学が専門。じつは海へ採集に出かけるのは年1回ほどで、普段は研究室で培養している個体を利用。研究室にこもることが多く、「四畳半研究者」と言われています



テーマは高知のグローバル化

近年、国や地域の枠組みを超えてモノや人がつながるグローバル化が進んでいます。岩佐先生のゼミナールでは毎年、高知という場でグローバル化を考えようと、身近なモノを題材にフィールドワークを実施することで地域を肌で感じ、高知と広い世界との意外なつながりを学んでいます。高知とグローバル化!? 一見、双方はあまり関係なさそうですが、アジア経済論などを専門とする岩佐先生はそうではないと断言します。「グローバル化の影響を受けているのは、東京などの大都市ばかりではありません。高知でも意外なほど色濃く見られ、農産物の問題をはじめ、調べることが尽きないですよ」輸入農作物、外国人労働者・研修生、TPP…。考えるべき問題はたくさんあるとのこと。



フィールドワークによって、貴重な「身体知」を得る

2013年度、岩佐先生がゼミナールで学生と一緒に考えたテーマは土佐茶。高知のお茶はかつて、静岡などのブレンド茶の材料として使われてきましたが、近年、その需要が減っているそうです。学生は茶の生産農家や組合、製茶メーカーなどに聞き取り調査を実施。そして現在の状況を分析し、TPP加盟による海外からの安い茶葉流入の可能性なども見通し、「ブレンド産地からブランド産地へ」という報告書にまとめました。「1年かけて真剣に取り組みますから、報告書が完成した時には、自分の子どもが産まれたかのように感動する学生もいるようです」



これまでに取り組んできたフィールドワークの報告書。報告書にまとめることで、全体像が視覚化できます。



先生に聞きました!

PROFILE

教育研究部 人文社会科学系
人文社会科学部 教授

岩佐 和幸

京都大学経済学部卒業。博士(経済学)。1999年、高知大学に着任。アジア経済論、アグリビジネス論などが専門。「研究の場として高知は面白い。調査に行くと、おいしいものを食べられるのもいいですね」

岩佐ゼミでは、これまでにマグロ漁業、直販所、ホエールウォッチング、土佐の一本釣り、外国人研修生と地場産業、しょうが、ゆず、回転寿司などの幅広いジャンルをテーマにしてきました。「大学で本を読み、書を持ってフィールドワークすることによって、自分の体を通して知識を得ることができます。学生たちは「身体知」(辻信一)と呼べる貴重な学びをするわけです」と岩佐先生。今年のテーマは未定だが、「ファッション関係になるかも?」とのこと。



PICK UP LECTURE
まなびの時間
高知大学の講義・研究

モノや
地域という
「窓」から世界を
つかまえる

温暖化対策や山の活性化にも繋がるんですよ



農学部 教育研究部
自然科学系 農学部 教授
原 忠

長野県出身。中央大学修士修了。博士(工学)。大学卒業後、いったん民間企業に就職した後、大学助手、高専准教授などを経て高知大学に赴任。「東日本大震災での液状化を見て、自分のやるべきことを再確認しました」

—原先生は地盤工学、地盤耐震工学が専門ですね。まず、研究されている内容を教えてください。
原 地震や風水害にあった時、地盤がどういった振る舞いをするのかについて研究しています。地震に耐える地盤をどうやって作るのか、地盤の上に載っている施設を保全するにはどうしたらいいのか、などが具体的なテーマです。
—坂部さんは大学院生ですね。研究室に入った動機は何ですか?
坂部 大学入学当初は下水について学ぼうと思っていました。しかし、東

日本大震災がきっかけで考えが変わり、防災をやってみたいと思って研究室に入りました。
原 やっぱり、震災の影響は大きいですよ。私はあの時、たまたま東京にいて、翌日には被害の大きかった浦安最大級の液状化で、あれを見て志を新たにしました。
—その液状化を防止するための新工法を開発されたそうですね。
原 6年ほど前、飛鳥建設株式会社他2社と学と民の共同で開発しました。「丸太打設液状化対策&カーボン

丸太で液状化防止。防災にも地産地消

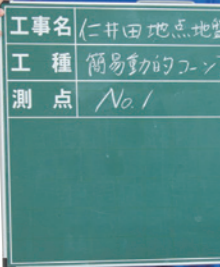


—坂部さんはどのような研究を担当していますか?
坂部 現地では木を入れたことに
原 じつは木は水中では腐らないんです。液状化しやすいような地盤は水が含まれているので、腐ることはありません。それに、木材は大気中のCO₂を貯蔵していますから、それを地中に打設することが温暖化対策にもなります。また、地元の木を使っていると、荒廃している山を活性化させるという狙いもあります。
—丸太を使うのではありませんか?
坂部 丸太は木を水に入れておくことで、液状化しにくい地盤になる要素は3つ。地盤が緩いこと、地下水などの水があること、地盤がさらさらした砂などでできていることです。この3つが重なる液状化が起ります。逆にいうと、1つでもなくせば液状化しにくくなる。そこで、木の杭を地中にたくさん打ち込み、木の周りの地盤を密にすれば、土が密に締まって液状化を防ぐことができます。
—なぜ木を使うのでしょうか。腐りやすいような気もしますが。
原 木は水の中では腐らないんです。液状化しにくいような地盤は水が含まれているので、腐ることはありません。それに、木材は大気中のCO₂を貯蔵していますから、それを地中に打設することが温暖化対策にもなります。また、地元の木を使っていると、荒廃している山を活性化させるという狙いもあります。

—実際に研究に取り組んでみて、いかがですか?
坂部 現場にどんどん連れていってもらえるのがうれしいです。東北の被災地にも足を運ぶことができました。この研究室で学んだことを将来、役に立てることができたらいいなと思っています。
—この工法が必要とされる地域は多いのではないですか?
原 本工法は千葉県と長野県で実績があり、高知県では高知市仁井田で施工中です。ほかにも和歌山県、三重県、どんどん広がっています。南海トラフ巨大地震では西日本一帯の地盤の軟弱な平野部で液状化が予測されています。今後はいろいろな地域で、地産地消型の取り組みを行ってほしい。これが大きな目標です。

研究室で学んだことを活かせるような仕事に就きたい

総合人間自然科学研究科
農学専攻2年生
坂部 晃子さん
徳島県出身。高知大学農学部卒業。原先生の指導のもと、浦安などに出かけての現地調査や研究室での実験に励む。卒業後は「できれば地元に戻って、高知大学で得たものを活かしたいですね」



東日本大震災で
自分の目標が変わりました

ジャズを楽しむ、魅力を発信！

ジャズ研究会 ゆずジャズ

夕暮れ時。楽器を抱えた学生たちが、集まってきました。思い思いにチューニングをしたり、メロディーをかき鳴らしたり。やがてメンバーが揃ったら、奏するのは軽快なスタンダードナンバーやしっとりとしたバラード。県内の大学で唯一のジャズのビッグバンド「ジャズ研究会 ゆずジャズ」の練習風景です。結成は平成22年。歴史の長い交響楽団や吹奏楽団などが活躍する高知大・音楽系団体のニューフェイスとして奮闘しています。

部長の斎藤寛俊さん(農学部3年)とメンバーの山地紗登子さん(人文学部3年)、西田拓未さん(人文学部2年)に、活動について話を聞きました。

「ビッグバンドとは、サキソフーンやトランペットなどの管楽器を中心にした大規模のバンド形態です」と斎藤さん。現在、18名(うち4名が高知県立立大学生)のメンバーで、週3回、練習に励んでいます。それ以外に合宿も行って、互いに教えあひながら演奏技術を磨いてきました。

ぼくらのキャンパスライフ

高知大生の今にエール!



大学祭において他サークルとのセッション風景

「ジャズを難しいと感じる人も多いのですが、ゆずジャズではそんな敷居の高さを取り払いたい。だから、初心者大歓迎です」と斎藤さんが言えば、「ゆずジャズで、ジャズを楽しむことを覚えた」と山地さんも話します。そして、「みんなが演奏が決まったときは、本当にうれし」と西田さん。また、他大学のジャズ研究会と積極的に交流しています。「お互いの合宿に行き来したりしています。いい刺激になりますね(山地さん)。

一方で、歴史の短い団体ゆえの苦労もあります。「楽器不足は悩みの種です。楽器は意外と高価なので、部費を貯めて買いそろえたり、借りたりしてやりくりしています(西田さん)。滞りなく運営していくために、団体の体制整備にも取り組みました。こうして困難をひとつ、ひとつ解決しながら、昨年12月

には初めての定期演奏会を開催しました。「少しずつ、ゆずジャズを作ってきたという感じで、いまも成長の途中です。今後は、少人数編成の演奏にもチャレンジしたい」と、斎藤さんはこれからの活動に意欲を見せます。

ゆずジャズでは、7月13日に高知市青年センターで行われる「青年センタースポーツフェスティバル」で演奏を披露する予定です。ゆずジャズの「元気で明るいジャズの音色を、聞きにいらしてみませんか？」



部長 斎藤 寛俊さん (農学部3年)

山地 紗登子さん(人文学部3年)

西田 拓未さん(人文学部2年)

ジャズ研究会 ゆずジャズ

ジャズの研究と技術向上を目的に、平成22年に設立された音楽同好会。現在、高知大学のメンバーは14名。学祭などで演奏を披露するほか、昨年は初めての定期演奏会を行った。持ち味は、明るく元気な演奏スタイル。「楽しんで演奏していることが伝わってくる」と聴いた人から感想をもらったことも。



直面する課題 土佐あかうしがいなくなる!

高知大学では今年5月7日、高知県特産の和牛である「土佐あかうし」の保全と生産振興に関して、高知県と連携のための覚書を交わしました。土佐あかうしは明治時代に渡ってきた韓牛(韓国の牛)をルーツとし、当初は農耕用として、次にで食用用として独自に改良されてきました。しかし、50年前には5万頭近くもいた土佐あかうしですが、畜産農家の高齢化もあって、どんどん減少しています。この数年は毎年200頭ほど減っており、しかも最近では減少傾向にさらに拍車がかかり、2013年にはわずか1720頭まで減りました。

「サシは少ないものの、赤身にはうま味がたっぷり含まれています。外見の愛らしさ、真夏でも放牧できる丈夫さなども特徴で、いまでも残っているべき特産牛です」と語るのは家畜繁殖学が専門で、土佐あかうしを研究テーマとする松川和嗣准教授。「健康志向の高まりとともに、味の良さがますます評価されるようになり、肉の値段が上がってきました。良いことではあります。その弊害として、本来なら次世代の子牛を産むはずのメス牛まで多数出荷されるようになってきます。このままでは、最悪、10年後にはいなくなってしまう」といった危機的な状況のもと、増産に向けての連携強化が行われたのです。

Action! 地域×高知大学

守れ! 土佐あかうし

高知県と連携! 活かされる高知大学の研究成果。



受精卵の保存に加えて、研修受け入れも計画



連携のための覚書をかわす 高知県知事 尾崎正直氏と高知大学学長 脇口宏

増産の結果が出るのは3年後。土佐あかうしを最もよく知る研究者、松川先生は「何としても、このこたを絶滅させないようしなければ。土佐あかうしと地域の20年、30年後のことを考えて、この事業に参画しましたと力強く語りました。



総合科学系 生命環境医学部門 准教授 まつかわ かずとく 松川 和嗣

信州大学繊維学部卒業。博士(工学)。家畜繁殖学、発生工学が専門。「地球温暖化が進行した時、暑さに強い土佐あかうしがいなくなると、日本ばかりか世界的にも困るかもしれない」

連携のなかで、高知大学はどのような役割を果たすのでしょうか。「大きく分けて2つあります。1つは研究面での貢献で、人工授精による受精卵の保存を行います。もう1つ、地域の畜産農家の減少に対応するため、約80頭の土佐あかうしを飼育している大学の農場を新規就農希望者に研修の場として開放し、牛飼いの技術を習得してもらいます」高知大学で保存した受精卵は、県が土佐町に整備予定の畜産施設に送られ、土佐あかうしよりも体の大きな乳牛のメス牛に移植。年間60〜90頭の増産が計画されているそうです。「ただ増やせばいいというものではありません。血統が偏らないように、多様性を保てる方向で取り組んでいきます」



全日本大学サッカートーナメント 出場

高知大学サッカー部 四国の代表として全国の舞台へ

高知大学サッカー部は、5月18日に行われた四国大学サッカートーナメント決勝戦に勝利し、14年連続24度目の優勝を果たしました。

その結果、8月8日から関西地区で開催される「第38回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント」に四国代表として出場します。



14年連続

海洋研究開発機構と包括連携協定を締結

研究だけではない 広範囲の協力体制の確立へ向けて

高知大学は、3月28日、地球深部探査船「ちきゅう」や有人潜水調査船「しんかい6500」をはじめとする多数の研究船・探査機等を所有し、海洋に関する最先端の研究及び技術開発を行っている独立行政法人海洋研究開発機構（Japan Agency for Marine Earth Science and Technology: JAMSTEC ジャムステック）と包括連携協定を締結しました。

本協定は、同機構と研究開発、教育、人材育成等に係る相互協力が可能なすべての分野において互恵の精神に基づき包括的な連携・協力を効果的に実施することを目的としたもので、これまで海洋・地質研究等の分野で相互に協力してきましたが、今回の締結によりさらなる成果が期待されています。

今後は、関係者による連携推進協議会を設けてより円滑な協力体制を築き、研究面だけでなく地域貢献など広い範囲での連携を目指して行きます。



▲調印式の様子

平成27年度設置予定(設置認可申請中) 新学部「地域協働学部」設置計画書を提出

次世代の高知を担う リーダーを育成

高知大学は、新学部「地域協働学部」を平成27年4月に開設するため、設置計画書を5月30日、文部科学省に提出しました。設置が認められると高知大学としては実に38年ぶりの新学部の誕生となり、現在の5学部体制(人文・教育・理・医・農)から6学部体制の総合大学となります。



▲学部新設 記者発表の様子



（設置認可申請中のため、内容は予定であり、変更する場合があります。）

地域における課題解決の現場を直接体験させるため、多彩な実習科目を配置し、地域への愛着や誇りを育てる教育を実施し、地域コミュニティの再生、商店街の活性化、地場産品を活かした商品開発など学生自らが企画を練り上げ、地域住民と協働しながら、組織・人を動かす力を身につけていきます。

（設置認可申請中のため、内容は予定であり、変更する場合があります。）

若者の県外流出、産業基盤の脆弱さ、災害対策といった様々な課題を抱える高知県を学びの現場とし、その課題解決に向けて率先して活動できる人材の養成を目的としています。

地域における課題解決の現場を直接体験させるため、多彩な実習科目を配置し、地域への愛着や誇りを育てる教育を実施し、地域コミュニティの再生、商店街の活性化、地場産品を活かした商品開発など学生自らが企画を練り上げ、地域住民と協働しながら、組織・人を動かす力を身につけていきます。

学会賞受賞等紹介 (平成26年3月～5月 教職員受賞分)

農学部 藤原 拓 教授
日本水環境学会 水環境国際活動賞(いであ活動賞)
[9th IWA International Symposium on Waste Management Problems in Agro-Industries(AGRO '2014)]

附属病院検査部 内山 伊代 臨床検査技師
(本年3月本学大学院博士課程修了)
第87回日本細菌学会総会 優秀発表賞
[Phage therapy experiment against staphylococcal lung-derived septic mouse model]

農学部 山本 由徳 教授
平成26年度日本作物学会 日本作物学会賞
[「水稲の移植栽培における苗の植傷みと活着特性に関する栽培学的研究」]

黒潮園科学部門 奥田 一雄 教授
第71回中国四国植物学会 功労賞
中国四国植物学会の発展に大きく貢献したことに対して授与

農学部 石川 勝美 教授
日本農業工学会 フェロー称号授与
日本農業工学会の関与する分野の学問技術の発展に継続的に顕著な功績のあった者に対して授与

女子/やり投げ



教育学部3年 佐藤 ひめかさん
記録 49m19(大会新記録)

女子/7種競技



教育学部3年 堀之内 舞さん
記録 4671点(高知県記録)

第68回中国四国学生陸上競技対校選手権大会(5月16～18日島根県浜山)において、高知大学陸上競技部の学生が2種目で優勝し、中四国代表として日本学生陸上競技対校選手権大会(日本インカシ)に出場することが決定しました。優勝した学生の氏名と記録は以下のとおりです。

陸上競技部 中国四国学生陸上競技対校選手権優勝
2種目共に、記録更新!

古田さんは今後、中四国代表選手として日本武道館で開催される第48回全日本女子学生剣道選手権大会(平成26年7月6日)に出場します。



高知大学剣道部員の古田実穂(理学部4年、四段)さんが、5月18日、愛媛県武道館において開催された第46回中国四国女子学生剣道選手権大会において第3位に入賞しました。本学女子剣道部員の中国四国個人3位入賞は、実に24年ぶりです。

第46回中国四国女子学生剣道選手権大会個人3位入賞
24年ぶりの快挙! 全国大会へ出場決定

高知大学二ニュース

清木元治特任教授 高松宮妃癌研究基金学術賞受賞

がん研究において受賞

平成26年2月21日、パレスホテル東京にて平成25年度高松宮妃癌研究基金学術賞等贈呈式が行われ、医学部附属病院次世代医療創造センター 清木元治特任教授が「がん悪性形質を制御する膜型マトリックスメタロプロテアーゼの発見」により、高松宮妃癌研究基金学術賞を受賞しました。

これはがんの領域において特に優れた業績を上げた学者・研究者に対して贈られる栄誉ある賞であり、授賞式では、公益財団法人高松宮妃癌研究基金総裁常陸宮正仁親王殿下より賞状が授与されました。



▲授賞式の様子

第44回日彫展 西望賞受賞

美術で復興を願う

教育学部の阿部鉄太郎講師が、第44回日彫展の最高賞「西望(せいぼう)賞」を受賞しました。西望賞は、具象彫刻で国内最大規模の公募団体である日本彫刻会が行う日彫展において最も優れた作品に授与される大変名誉ある賞です。

受賞作品「56億7千万年後の君に」は、美術による災害復興の呼びかけに賛同した阿部講師が「愛と癒し」をテーマに制作しました。方舟に腰掛ける天使の右手の指先は弥勒菩薩半跏思惟像をモチーフとしています。同作品は、地方巡回展の後、東北地方の被災地で展示され、被災者の方々の心の復興を支援してまいります。なお、阿部講師の作品は、笠間日動美術館(笠間市)のフランス館屋上、五台山竹林寺(高知市)境内、高知大学総合情報センター図書館(朝倉キャンパス)や高知医療センターのエントランスホールに常設されていますので、是非ご覧ください。



受賞作 「56億7千万年後の君に」



「愛と癒し」がテーマ。被災者の方々の心の復興になればと思います。
教育学部講師 阿部 鉄太郎